



2 学期からハイペースで発行してきた「HONTO」もいよいよ最後になりました。大トリはやはり校長先生です。

こんな本を読んできた

校長 清水博行

国語の授業は退屈だった。一つの作品を何時間もかけて読み、「指示語は?」、「作者の言わんとしていることは?」、「この段落の要旨は?」など細かく問うていく授業は、時計とのにらめっこの時間でもあった。

高校2年になって、大学出たての先生が「現代国語」を教えてくれることになった。1学期の初め、旅の途中で出会った旅館の若女将との思い出を綺麗に綴った福永武彦の随筆『貝合わせ』の授業で、先生は一人の作者について、作品を読み上げることの面白さを語ってくれた。



『忘却の河』など福永武彦の何冊かは今でも本棚に残っていることから、本を読むスタイルに影響を受けたと思う。

さらに、その先生の影響(紹介)で夢中になった作家が柴田翔で、その代表作、『されどわれらが日々』は、1960年代後半から70年代にかけてのベストセラーだ。

戦後しばらくまで、日本には「政治の時代」と呼ばれた時期があり、革命を信じ、安保闘争等に夢中になった若者は少なくなかった。その波は幾度か繰り返すが、運動に挫折したり、熱が冷めていって、現実的な生き方に収まっていく。しかし、本当はどう生きたかったかという思いは消えず、心の棘が抜けないような葛藤と現実からの逃避がセンチメンタルに描かれている。

この本をきっかけに、『贈る言葉』や『立ち尽くす明日』など、柴田作品を集め、読みあさった。そこに描かれている時代や世相は、当時、高校生だった私にとって、遠い世界であったが、背伸びして分かった気分になり、ある種のあこがれを感じていたと思う。大学生、社会人になってからも、幾度となく読み返すことがあったが、その都度、少しずつ違ったものを感じた。それは、自分の経験や成熟具合によって、読み取れる内容や感性が変わってきたからだろう。

少し後の世代の若者を描いた作品として、東京オリンピック前後の1960年代に青春を送った椎名誠の回想録的小説『哀愁の町に霧が降るのだ』も興味深い。主人公(椎名)は喧嘩に明け暮れた千葉での中・高校時代を経て、「このまま、親もとで暮らしていくのは、いかにも無能なような気がした」と、東京に出てくる。家賃は安いが昼間でも日が差さない暗く汚い東京下町の6畳のアパート(克美荘)で、高校時代からの知り合い3人と極貧の共同生活を繰り広げる。誰かに稼ぎが入れば食欲が充たさ

「あつた」「あつた」のころを懐かしむ『転換期を生きる』清水博行

れ、大酒をくろう。軽薄で何とも馬鹿馬鹿しいが、同じ境遇の仲間がいることで、最低の日々が祝祭的な日々にも感じられるように描かれている。一緒に住んでいながら、それぞれが好きなことをやり、弁護士、イラストレーターとスゲー奴になって克美荘を去り、共同生活の幕は閉じる。



実は、1981年に刊行されたこの本を直接手にしたのはつい最近のことである。内田樹『街場の教育論』において、「(都会で、)孤独に暮らす貧しい若者にとって、最も大事なことは仲間をつくるということだ」として、この本が紹介されていたのがきっかけである。

内田樹氏によれば、1970年代までの日本では、共同体を形成する能力、他者と協働する能力は子どもたちが最優先で開発すべき人間的資質であり、当然身につけるべきものとして観念されていたが、1980~90年代の初めに日本人はでたらめな豊かさ(バブル)を経験したことで、仲間と互助的な共同体を作って、貧しい資源を分かち合うという作法や技術をすっかり失ってしまったとされる。

この捉え方が、妥当か否かは別にして、ネットカフェ難民やパラサイト・シングルという言葉さえなかったあの頃、集まれば馬鹿騒ぎに興じていた自分の青春時代を思い起こさせてくれる一冊であった。引用を通じて、読む対象が拡がり、知らなかった本に出会う楽しさも味わった。



その内田樹の編集による『転換期を生きるきみたちへ』を最後に紹介する。この本は、当たり前と思い込んでいたことが大きくひっくり返る歴史的転換期、その時代をこれから生きていくことになる中学生・高校生に対して、それぞれの分野で一言を持つ11人が、「何が起きているのか」、「なぜ、そのようなことが起きたのか」、「これからどう事態は推移するのか」等を、それぞれの視点、切口で、極めて平易な文章で書きしたためたものである。

その中のひとつ、「13歳のハードワーク」と題した小田嶋隆氏の論考では、「生きがいや自己実現を職業に求めるのは筋違いで、どこかに自分に向けた楽しくやりがいのある仕事があるという職業信仰は空虚な不遇感の温床になる」と、これまで、君たちが教えられていたことや思っていたこととは逆行するようなことが書かれている。

それじゃ、どう考えるかは、本書に丁寧に書いてくれているので、安心して読み進んでもらいたい。大事なことは、本を読んで、自分が当たり前と思っていたことが、「違うなあ」、「おかしいなあ」と感じることであり、そして、気になったことについては、そのテーマについて読み深めることである。そのことが、その先にある、深い理解と自分らしさの発見につながるかもしれない。